

河上・経済学の今日的意義

相澤 秀一

河上肇は明治、大正、昭和の三代を通じて、日本の思想界において、常に先端的役割を演じた学者・思想家である。思想家としては、はじめは、人道主義・改良主義の持主として、すなわち『貧乏物語』にみられるような者として出発し、最後には『第二貧乏物語』の著者に転身した。経済学者としては、『日本尊農論』、『日本農政学』、あるいは『日本経済新誌』掲載の諸論文にみる如く、反社会主義的というか、社会主義に無理解な或る意味での国家主義的な経済学者としてブルジョア経済学の研究から出発し、ついにマルクス主義経済学者に終ったのである。従って河上・経済学をいう場合にはマルクス主義経済学を指すこととなる。それ故に、河上・経済学の今日的意義ということは、一般的に言って、マルクス主義経済学の今日的意義ということになつてしまふ。それでは論題限定の意味はない。私がここで取り扱おうとした内容は、河上の経済学は今日如何に評価すべきかという課題を中心に、彼の講義を直接に聴いた人間として彼の学問研究・真実追求にたいする態度に言及し、若い世代への参考資料たらしめようとしたものである。執筆の動機は京都大学の学生に招かれて六月六日、「河上祭」で一場の講演をせざるを得なくなったので、その時話した内容を記憶をたどつて文章化したものが此の一文——敢て論文とは言わない——である。学術論文を内容としている本誌には徐々に不

相応なものでないかと懸念する。が、時にこうした小文も本誌に組み入れられることもいいのではないかと思つて、先鞭をつける意味において掲載させていただく。

河上肇・『経済学大綱』は昭和二（一九二七）年度の京都帝国大学経済学部の経済原論の講義である。週三回六時間の通年講義である。そしてこれが彼の京大での経済原論の最終講義であり、本として世に出たのは昭和三（一九二八）年十月、改造社・『経済学全集』の第一巻としてである。本書の刊行に先き立って河上は京大を去り、野に下ってマルキストとして理論・実践の世界に入り、行きつくところ日本共産黨員として囚われの身となつて三年九カ月の獄中生活を送ることとなる。彼のここにいたるは決して偶然事ではなく、すでに本書刊行時にその決意をうかがうことができる。「主観的には私は努めて大学教授たるの地位を辱しめざらんことを志したのであるが、客観的にはそのために大学教授たりえざるものに転化したのである。大学教授なる外被は、私の研究のより以上の発展と両立しがたき点に達した。職を退くことは、私自身にとつても、矛盾の一解決であつたのである。私は久しく重荷を負うて阪道を登りつつある心地がしてゐた。大学を退いたとき、私はこの重荷を肩からおろして、しばらく峠の茶屋で一服してゐるかに感じた。最近公けにした『経済学大綱』は、この茶屋での休息中に整理したものである。その書は、今や印刷製本を終へられて、私の前に存在してゐる。それは私に向つて、もはや峠の茶屋を立ち出づべき時機の到来したことを、囁けるものの如くである」（『社会問題研究』第八十一冊・三四頁）。河上の実践への決意・覚悟、すなわちマルキストからコミュニストへの転身の覚悟、はずでに哲学研究に取り組もうとして「新たな旅」へと歩きはじめとした一九二四年にさだまっている。『自叙伝』は語

っている——「マルクス主義の経済学を真に理解しようと思へば、どうしても其の哲学的基礎となつてゐる唯物弁証法を理解せねばならず、それを避けてゐるかぎり、私は『資本論』そのものの本当の理解を永久に断念せねばならぬ。そうした事情が、学問の問口の狭い私をして、——精力の放散を固く警戒してゐる私を駆つて、——新たに哲学の研究に志すに至らしめたのである。……ところで、その哲学的基礎にまで遡り、本当にマルクス主義全体を理解せねば止まない、という決意は、結局、自分を本当のマルクス主義者に仕上げようという決意なのである。……一身をマルクス主義者として仕上げるというためには、ただ大学教授をやめるという位の覚悟だけでは、間に合わなかつた。将来どんなことになるかも知れないが、どんな目に逢つたとて仕方がない。一切は成行に任せて、一身の利害得喪は顧慮しないことにしよう。こういうのが、学問的に前進するために必要とされた生活上の姿勢であつた」(『河上肇著作集』第六卷・一二六―七頁)。若き日の人道主義的な実践と言ひ、後年の革命的な実践と言ひ、彼の思想・理論は終局的には実践と結びつかねばならなかつたのである。然るに、若き日の行動を狂気と観、後年の実践活動を分を弁えぬ思い上りである、と難ずるのはあたらない。河上は評論家ではない。眞実追求に一生をかけた学者であり研究者である。最後までマルクス・レーニン主義者としての自己を、獄中においても、戦時中も、戦後も、変えることをしなかつた。『経済学大綱』は立派な本格的なマルクス主義経済学の講義である。当時の野蛮な天皇制日本の国立大学の講壇で、かような講義をなすということには、強固な覚悟と決意が必要であつた。そこには実践をはなれての単なる理論としての経済原論はない。理論と実践との統一は彼の立場のうちにあつた。

『経済学大綱』は京都大学教授としての最後の講義であるが、かような講義内容に到達する過程は文字どおり

紆余曲折の道程であった。ブルジョア的あるいは俗流的経済学から入ってついにここに到達したのである。経済原論の實質的な処女作と言ってもいいであろう一九〇五年に公刊された『経済学原論』上巻の篇別構成は、第一章経済上の欲望・第二章財物・第三章経済行為・第四章経済・第五章経済学、となっており、また一九一〇年刊行の『経済学の根本概念』は、第一章財及び経済財・第二章労働及び経済労働・第三章経済及び国民経済・第四章現象及び経済現象・第五章学及び経済学、となっている。ここには欲望を起点として経済学の体系化を行なう独乙流の俗流経済学に依拠する事情が窺われる。事実彼は、一九〇六年に『ワグナー氏経済学原論』上巻、と題する解説本を上梓している。彼が自らをマルクス主義者、あるいはマルクス主義者たらんとする者、と確信した一九二四年に先き立つ数年間、すでにその間マルクス経済学を研究していた——と言うのは、たとえば彼は一九一八年八月六日夜、京都帝国大学夏期講習会の科外講演として約二時間にわたって、『マルクス社会主義の理論体系』と題しての講義を行なっている——にもかかわらず、大学での講義にはマルクス主義的なものを窺いえない。一九一六年から一七年にかけての分配論の講義では、バヴェルク、タウシッグ、クラーク、カーバー、フィッシャー、カムマンズ、等の紹介にとどまり、また一九二三年度の経済原論の講義体系は、『経済学大綱』とは大いに異っている。このことはまた眞実追求にきびしい河上が、マルクス経済学にたいする不動の確信をもたざるかぎり、彼の原論講義を根本的に改善する気にはなれなかったのであろう。『経済学大綱』はその意味において彼の大学教授として到達した最後の・そしてマルクス経済学にたいする不動の確信のもとになされたものである。『経済学大綱』は内容的には『資本論』の祖述である。そしてまた、その後における日本での『資本論』研究も進んでいる。殊に、『資本論』成立への思想史的研究のための資料には制約があった。マルクス・エンゲル

ス全集の第一部第一巻の刊行は一九二七年、『経済学・哲学手稿』、『ドイツ・イデオロギー』の全文、が公刊されたのは一九三二年、『直接的生産過程の諸結果』、『要綱』、はそれ以後である。此のような事情によって、河上のマルクス経済学の解釈において不十分のところもあろう。然しそれにもかかわらず、『経済学大綱』は、経済原論の講義として、アカデミック・カリキュラムの枠内における講義として、今日的にみて水準の高いものであると考えられる。私自身この年令になって、大学において経済原論を講ずること多年に及ぶも、四十九才の河上の講義の足もとにも及びえない菲才をつくづく感じてゐる。

先きに私は河上の辿り来った思想・理論上の、また実践上の、遍歴道程は紆余曲折の過程であつたと言つたが、壁にぶつかり、その壁が誤まりからきていることが分れば大胆に自己批判して誤まりを克服し前進したのである。然しこのことは、現象的には極端から極端に走る、節操のない思想家・理論家の如く映写された。そしてそのために酷しい非難・批判をも受けたのであるが、その中を一貫する河上のすじがねは「眞実を求める柔軟な心」であつた。「つまり、本当のこと、眞実を求めてやまない心がつらぬいていたのでありまして、眞実を求めてあちらにぶつかり、こちらにぶつかつて、極端から極端へ走つたように見えることにもなつたわけだと思ひます。そしてそのように眞実を求めて学問の上で最後に到達したのが、マルクス主義の経済学であつたのではないかと考へます。しかし、さらに一歩進んで、何故に眞実を求めたかということになりますと、私は、結局、河上には『人間を愛する純眞な気持ち』がいつもたえず動いていたといつてよいと思ひます。だから、河上を批評する人たちが、河上を人道主義者だと宗教的な道を求める求道者だとかいつているのは、この面で當つてゐると考へます。……」(一九六四年六月一五日大阪での河上肇著作集刊行記念講演会における末川博氏のメッセージ、から)。

個人雜誌である『社会問題研究』の第一冊が出されたのは、一九一九年一月である。社会問題に対する関心、その考え方において、依然として此の段階では人道主義的な、したがって非階級的な見地に立っているもの、自己の考え方の反体制的であることは充分承知していた。「余の思想は、仮ひ社会の或一部の人々の利益の為に危険なるものであるとしても、社会全体の利益の為に決して危険なるもので無いと確信して居る。否な余は、常に社会全体の利益を以て其中心の標準となすことに依り、或事を主張し或事に反対して居る積りである」（前掲・三頁）。一九一九年、二〇年、二一年、ころには、此の雜誌の上で、マルクスの経済学説、唯物史観、についての解説を行ない、また『賃労働と資本』を訳述していることから考えて、マルクス主義への関心と研究意欲が昂まりつつあったことは充分に看取される。自らマルクス主義者として確信したのは前述の如く一九二四年頃である。恰も私の書齋の壁に懸っている雲版に河上の筆になる三首の短歌の書かれてある色紙があるが、その為書に、「辛巳正月別れに臨みマルクス主義者としての私の半生の歌を録して相澤君に贈る」、として書かれてある短歌は下記の如くである。(1) 旅ごろもはらひもあへぬ我ながらまた新たなる旅に立つかな (2) たどりつきふりかへりみれば山川を越えては越えて来つるものかな (3) 我もまた深山の奥の苔清水あるかなきかのかそけさに生く。(2)は一九三二年八月、日本共産党に入党したときのよるこび、感慨をうたったもの、(3)は一九三七年六月十五日、出獄の日の歌であることは周知の如くであるが、マルクス主義者としての生涯の出発点となる (1)の歌は一九二四年、病んで新和歌の浦に静養しつつあったとき、そして同年七月号の雑誌『改造』に掲載された「社会主義は闇に面するか光に面するか」という、その前年に公刊された河上の『資本主義経済学史的発展』の書評を内容とする榎田民蔵の論文がきつかけとなって、より厳しいマルクス主義者としての研究に入ることを決意したこと

の表白である。だから私は素直に此の年代を以てマルクス主義者河上の生涯の始まりと考えたい。『経済学大綱』以後、『マルクス主義経済学の基礎理論』、『マルクス主義経済学』、『第二貧乏物語』、そして最後の『資本論入門』が主要な業績である。殊に一九三二年に出された『資本論入門』について彼自ら次ぎのように語っている。「この著書は私が公にし得た最後のものであり、また半生にわたる私のふつつかながらも懸命にやって来た研究の結果を集成したものであり、しかもこの書の公刊された昭和七年十一月には私は已に日本共産党員として地下に潜伏していたものであるから、これは私が意を決して党員となり得た時の思想上の姿とも云へる。……この書の発売と同時に頒布を禁ぜられたので、恐らく極めて僅かな部数しか世に残っては居まいかと思ふ。……私はこの一冊の本が大切に保存されんことを希望してやまない。昭和十四年六月二十六日 河上肇識」。

『資本主義経済学の史的発展』は初版を一九二二年八月に出して、私の手にする一九二七年版は二十六版である。菊版六二七頁に及ぶ尠大なものであって、第一章アダム・スミスの先駆者・第二章アダム・スミス・第三章マルサス及びリカード・第四章ベンタム及びジェイムス・ミル・第五章ジョン・スチュアート・ミル、付り、カライル及びラスキン、をその内容とする。一九二五年の第二十一版の序文に、前掲榎田民藏の批判論文に若干答えるところあるも、その故に本書の改訂は行なわれていない。河上によれば、資本主義経済は必然に利己的活動是認の理論を生む。各個人が経済上において遺憾なく自己の利益を追求すれば、そのことは期せずして社会全体の経済的繁栄を齎らすにいたるということ、そのことを理論的に説明することが資本主義経済学の任務なのであって、経済学史はこのような資本主義経済学理論の歴史的発展を取扱うものだと言く。その立場は当然に唯物史観でなければならぬが、果してその立場が守りとおされたかどうか問題であって、依然として色濃く人道主義

の見地がただようてゐることを否定しえない。だから、思想史の取扱方は唯物史観把持者の河上としては甚だ不徹底である、というのが榎田による批判の骨髄である。榎田によれば唯物史観において経済的意識形態たる経済思想あるいは経済学説は諸他の意識形態と異つた地位にある。この史観の立場においては、「経済史は、その職分として、生産関係並にそれより必然に発生する階級闘争の史実を明かにするものであると共に、経済学史は、事実としての思想そのものの内容の探究以外、更に進んで論理的にも亦歴史的にもそれが階級意識の表現としての発展を研究するものであると云ふやうなことになるであらう。従つて経済の学史は通常云はるるやうに、経済史実と照応して始めて理解せらるべきものであるは勿論、常に、各時代の階級闘争の事実を前提して説明せらるるか、又それぞれその学説に於ける主要な範疇や法則やの理論的分析から一定の階級闘争の反射としての階級意識の存在を見出すことに依つて、如何にそれ等の学説がその時代の階級意識の表はれであり又その発展であるかを明かにすべきもののやうに思ふ」（『改造』・六頁）。然るに河上は経済学の発展について、経済事実を軽視して、その時代の道徳論、哲学論ともいうべきものを重大問題として取り上げる。しかもその道徳論は秀れた特定の思想家個人の占有物として歴史的に継承されるという関係であつて、恰も思想の弁証法的発展をそのような関係としてみる。だからマンダヴィルにはじまる利己的な暗い人間性は認の思想がラスキンにいたつて明い人間性を強調する反対物に転化した。「大胆に帷をかかげよ、光に面せ!」、の句で『資本主義経済学の史的発展』を結んでいるが、もともとカーライルやラスキンの思想は貴族主義であつて反動思想である。それが社会主義に通ずるとは考えられない。その上、両者は功利主義から出たものではない。資本主義の打倒者はその邪悪なるものに面してのみ生まれる。「社会主義は闇に生れるが故にのみ光を産むのであつて、光に面するが故に光を産むのでは

ない。むしろそのより多く闇に面するに依つてより多く光に面することができらう」（『改造』・三八頁）、と榎田は結語に言う。いづれにせよ、河上は榎田の批判を契機に、後ちにはまた福本和夫氏の批判を受けて、マルクス主義哲学の研究に精力的に突入する。『唯物史観に関する自己清算』一九二七年から始まる。

『経済学大綱』を大学の経済原論講義とすることは到底許されぬ情勢であり、すでに此れが京都大学での、国立大学教授として到達しえたりぎりの限界であったことは河上の自覚するところであった。大学を去つた彼の身边は急にあわただしさを加える。峠の茶屋で一服しおえた彼は、決然として荒浪高い大海に乗りだして行く。マルキスト学者としての決意は、此れまで個人雑誌であった『社会問題研究』の变革について読者に訴えるの一文（第八十九冊・一九二九年一月二十一日）に窺いうる。日本プロレタリアートを取りまく内外情勢を語つて、本誌の任務を説く。「かかる現実が規定するところの・マルキストの任務は、第一に、プロレタリアートの階級意識の啓発でなければならぬ。プロレタリアートの組織化でなければならぬ」。

『資本論』の性格は、第一には階級闘争の理論書であるということ、即ちブルジョア経済学にたいするプロレタリアートの側からの批判書であるということであり、第二には、唯物弁証法の立場を以て資本主義を分析したものであるということ、即ち資本主義変革の革命理論書であるということであり、第三には、理論と実践との統一が、経済学と哲学との統一の形において組み立てられているということである。河上の『資本論入門』は正しく此の性格規定を受けついでものと考えられる。彼は此の書において革命家としての立場を堅持し、実践的意欲をその内に蔵しつつ、彼の三十年間にわたる経済学研究成果を大成したのである。『資本論』にたいして謙虚に取り組んで正しくそれを理解し解説しようとする努力したものであつて、此の研究態度は今日の我々も亦学ばね

ばならぬものであるが、同時にまたこの書物は今日の高い水準の『資本論』研究の日本の学界にあって、不滅の光を放っているものと思う。河上は明治、大正、昭和の三代にわたって、日本の思想界の先端を歩みつづけ、大きな進歩的な影響を与えた。『貧乏物語』と『第二貧乏物語』との間にみられるが如く、最初は人道主義的・改良主義的思想家として登場し、最後には革命的なマルクス思想家に転身したが、此れこそ「真実を求めて止まぬ」思想家の成長の姿であって、何ら難すべき余地はない。

河上がその経済学研究の途上において労働に関心をもったということは正しい着想である。蓋し社会生活の基礎たる物質的生産及び再生産は労働を離れて考えられない。経済と労働は切り離され得ない。「人間は覇権を争ったり、政治、宗教、哲学等に従事しうる前に、何よりも先ず飲食し居住し着衣し、従って労働しなければならぬ」。「一年と言わずただの一、二週間でも労働が停止されるならば、如何なる国民でも野たれ死にしてしまうであろうことは、どんな子供でも知っている。種々の欲望に相応した額の諸生産物は社会的総労働のうちの種々のかつ量的に一定した額を必要とするということも、同様に分り切ったことである。社会的労働が一定比率において配分されることのこのような必然性は、決して社会的生産の一定形態によって廃棄されるものでなく、ただその現象様式が変化しうるだけであるということは、自明である。『労働はあらゆる社会形態から独立な、人間の生存条件であり……人間生活を媒介するための永遠の自然的必然である。』『労働の時間は交換価値が廃棄されようとも、依然として富の創造的実体であり、富の生産が必要とする費用の尺度である。』

以上の文言より労働が人間生活にとって不可欠な要素であり、同時に労働の合理的管理が経済の基本であることを教える。河上の労働に関する見解は、古くは『経済学の根本概念』（一九一〇年）、『経済と人生』（一九一一年）、

『労働の苦痛に関する一考察』（一九二二年『社会問題研究』・二三、二四冊）一九三三年度の『経済原論講義録』、『資本論入門』・第十五章第四節、等に見られる。河上の労働観については杉原四郎氏が詳しく考察している——『河上博士の労働観』・『経済評論』・一九五六年二月号——。私は今それに駄足を加えようとするものではない。かねて私は人間生活の根幹たる労働が、質的にも量的にも疎外された資本主義社会においては苦痛たることは当然なるも、社会主義社会においては如何であろうか、ということに関心をもっているが、河上の問題もまたそこにあつたというべく、従つて此の問題をどう解決しているかを、少しく考察したいというのが私の意図である。

経済は社会内諸個人の生産活動を離れてはありえない。人間生活の必要物は極限的には衣食住に関する生活資料であるが、かかる使用価値の生産が社会的分業体系のもとで社会的生産として行なわれているのであるが、一般的に言つてそこで重要なことは、計画的と無計画的たるを問わず、社会的労働の各生産部門への合理的配分と能率的效果ということである。その場合、たとえ生産物が商品形態をとらず従つて交換価値は廃止されているとしても、労働が生産物創造のために必要な費用の尺度であるかぎり、使用価値に社会的労働時間が対象化されているという認識にもとづいて、社会的労働時間の合理的な配分と節約——能率的效果という認識が出てくるのであつて、このことは労働観の問題意識に通ずる。労働は手足筋肉の活動であるかぎり、而かもそれが一定限度を越えるかぎり尚更に、肉体的に苦痛を齎らす。かつて経済学が労働と遊戯との異同を論じて、目的在外活動が苦痛をとまなりも目的在内活動は苦痛をもたらさない、など主張し、河上もこの論議に仲間入りしているが此れは全く無意義である。強いて生かしうるとするならば、何物かの生産という目的在外活動であっても、その活動自体が労働主体の自覚において、自主的自発的なものとしてそれ自体が恰も目的在内的活動の如くに受け取られる

ようになったら、肉体的苦痛は主観において軽減され、否、そのうちに働くことの悦びをすら見出すであらう。

『社会問題研究』、第十冊の「断片」に言う——「労働時間制限の問題が、現代社会の文化問題として、重要な意義を有する所以の一は、所謂賃傭労働者の労働が、マルクスの言へる如く、*ein Leben selbst* と為り得ずして、*ein Opfer seines Lebens* たるが為である。此意味に於て、或種の精神労働は、全く労働時間制限問題の範圍外に属する」（八頁）、としてスマートから引用して（『経済学者の第二思想』一九一六年）教職業労働をあげている。多くの人の経験する如く、強制されざる自発的な研究活動自体は、時間を超越して、その労働自体が生命又は生活の犠牲とは考えられず、むしろ生命または生活そのものである。河上においても亦このような認識があったと考えられる。さればこそ、「労働の苦痛に関する一考察」なる論文において、賃傭労働は全く彼らの生命を犠牲とするものであるから、かかる生命の犠牲の減少を要求するものとしての労働時間の短縮は文化的意義を有する、となし、而かもそれを以て問題が根本的に解決されるのではない、新社会の到来にまつ以外に途はない、とのかに感得している。彼の考えた解決策は何か。職業選択の自由と生活の保障である。「如何なる仕事に従事しても、生活に差支えないと云ふことに為つて、始めて各人は其の目的とする仕事に全力を献げ得る。ところが各人の生活を保証すると云ふことは、社会の物質的生産力が或る程度以上の発展を為し遂げた後、始めて実現せられうることである。……生産力の発展——斯ういふ物質的条件の具はることが、吾々の理想実現の前提である」。（一一—二頁）。ついで続く「労働論を試みたる後の問答」において、共産主義社会に触れているがもとより十分のものではない。しかし、この所論のうちに、生産力の増進を基礎において、労働の資本制的疎外からの脱却、職業選択の自由と生活保証、労働時間の短縮、人間生活の全面的な開花、そういう期待と展望が見られるの

であつて、『入門』の『資本論』第一卷第五篇第十五章第四節の解説において、右の見解は結実する。河上はやはり日本思想界の秀れた先駆者である。他人のための労働を自分のための労働にかえる、そしてその自分は共同体と同一人格における自分である、という認識・自覚、こうしたことは資本制様式を止揚して始めて可能である。「社会主義社会で生産力の発展を力づくよく推進する決定的な要因は、人びとの高い革命的熱意であります。社会主義制度の本質的な優越性は、搾取と抑圧から解放された勤労者が祖国と人民のため、社会と集団のため、自身自身の幸福のために自覚的熱意と創造的積極性を發揮して働くことにあります。資本主義社会では、勤労者は失業と飢餓の脅威にかかず、しかたなしにはたらくため、生産の発展や技術の発展になんらの利害關係をもたないけれども、社会主義社会では、勤労者は労働の結果が自分自身と自国民、自分の祖国のためにふりむけられることをふかくさとしているので、生産を發展させるため、熱意をもってはたらくようになるのです」(金日成・「社会主義経済のいくつかの理論的問題について」・『世界政治資料』・三〇七号)。

この小論は河上の『経済学大綱』から書き始めたが、この京都大学での一九二七年度の経済原論の講筵に私もまた列つたものであつて、恩師河上の講義の姿が今も彷彿として眼前に浮んでくる。今、大学紛争の最中にあつて、大学の在り方、大学教授の在り方、教師・学生相互間の在り方、など反省しなければならぬとき、私たちの学生時代を想い起こし、若干の参考に供したい。今日の大学が大衆化し大量化したことにつれて、そのこと自体は日本の社会発展のために慶ぶべきことながら、他面マスプロ講義が一般化し、教師・学生の對話はなく、相互不信の感情が深められるということが切りに指摘される。それ故大学は、それぞれの特殊事情を考慮して、或いは演習の強化、小集団教育の充実、という教学方針のもとでマスプロ教育の弊害を除去しようと努めている。

私も亦そのことの持つ意義を否定するものではないが、形だけの小集団教育、学問への情熱もない小集団での対話、そのようなものは全く空しいことであると考える。マスプロ講義は社会科学部門においては今に始ったことではない。今日流に言えば、河上の講義は正にマスプロ講義である。その授業の様相はどうであったかということ、教室は文字通り立錫の余地ない有様で、通路に坐っているもの、廊下から窓越しに聴講する学生もあるというほどのマスプロ講義であった。然しそのことによって教師・学生との疎遠が生じ、研究・教育の効果が失われたとは考えない。大学は学問を通して教育を行なうところである。学生が自ら学問研究の意欲をもち、学問研究をとおして自らの人間形成につとめるのを援助指導するのが大学の役目である。学生の学問への情熱、それなくんばどんな形態の授業であっても無内容空虚である。然し学生にたいし学問への情熱を湧かさすことは教師の責務である。河上は、「隔日に講義を受持っている場合には（原論の講義は週三回であった―相澤）、いつもその前日の少からざる部分を翌日の講義の準備に費すことを余儀なくされていた。たとひ内容に変化を加へない部分でも、新たにそれを書き直して、ノートのインキが鮮かになっていないと、私は講壇で元氣よく講義することができなかったのである」（『社会問題研究』第八十八冊・一一二頁）、と言っているが、彼が講義にたいして如何に誠実であったか、ということが知りえられるのであり、そしてまた、学問にたいする情熱、学問研究の前には何者にも怖れず、勇氣と情熱を以て臨まれたこと、学問の尊厳さを教えられたこと、そのことが偉大な学問的教育の効果であったことをしめしめと想いだす。私はさいきん、『経済』・七月号の「ずいそう欄」に、「学問と大学」という一文を書いておいたが、委曲はそれを読んでいただくとして、教学の中心は学問の研究、それをおとしての教育、であると確信している。